

旭川医大病院ニュース

第二外科長に就任して

第一外科長 久保良彦

本年四月一日より旭川医科大学附属病院第一外科の診療を受け持つことになりました。ご承知のように第一外科は当院開設時より鮫島夏樹教授が担当されてきました。私はその当時より副科長としてお手伝いさせていたが、すでに十二年余の長い間職員の皆様にお世話になったことになりました。昨年八月、鮫島教授が副学長・附属病院院長専任となられ、図らずも私がその



後任に選ばれました。真に光栄に存じますと共に責任の重さを痛感いたしております。全力を挙げてその任に当たりたいと考えておりますが、皆様にはこれまで以上のご鞭撻とご支援をいただきたく、この紙面をお借りしてお願ひ申し上げる次第です。

第一外科では、従来から鮫島教授のご方針で消化器・一般外科、小児外科および胸部・心臓血管外科といった幅広い領域にわたる診療と臨床研究が手がけられてきました。この外科を受け継ぐ者として、この方針を踏襲し、さらに充実させるよう努力しなければなりません。第一外科研修機関として少しでも広い領域に対応できる基礎技術を身につけてもらうという目的に叶う方針と考えられるからであります。私自身は長年取り組んできた関係

題字は吉岡前病院長
(編集)
旭川医科大学医学部附属
病院広報誌編集委員会
委員長
清水教授(産婦人科)

上、胸部心臓血管外科に重点をおいて仕事を続けてゆきたいと考えております。近年医療技術の高度化は目覚ましいものがある一方、対象患者の高令化、あるいは対象疾患の多様化も顕著であることはご承知のとおりであります。いいかえまして治療する者、される者はずれにとりましても医療はますます手がかり、複雑化する傾向にあります。もっともと外科領域ではパラメディカルの方々を含めたチームワークがその仕事上最も大切な基本条件であり、ますが、このような医療の複雑化はその緊密なチームワークをいよいよ不可欠な要件としてきております。勿論第一外科もそのようなチームワークを基盤にしなければ仕事にならない診療科の一つであることは申すまでもありません。関連診療科をはじめ中央診療各部門との円滑な連携を保ち、当然のことながら患者第一の診療をすすめてゆきたいと希っております。

旭川医科大学にお世話になつて早二ヶ月が過ぎてしまいました。一日も早く大学(病院)の慣習等にもなれ、皆様方に迷惑のならないようにと思っております。しかし、夫々の病院によつて、しきたり等が違い今迄の経験だけではすまされない事も多々ありますので、もう一度初心に帰つて、一から勉強したいと思っております。近年国立大学病院も、地

事務局長に就任して

事務局長 織田忠利

旭川医科大学にお世話になつて早二ヶ月が過ぎてしまいました。

旭川医科大学にお世話になつて早二ヶ月が過ぎてしまいました。一日も早く大学(病院)の慣習等にもなれ、皆様方に迷惑のならないようにと思っております。しかし、夫々の病院によつて、しきたり等が違い今迄の経験だけではすまされない事も多々ありますので、もう一度初心に帰つて、一から勉強したいと思っております。近年国立大学病院も、地



医事課長に就任して

医事課長 佐藤文宣

先日、T・Vで倉本 聰さんの主宰する富良野塾のドキュメント番組を漫然と眺めていたとき、改めて目の開かれる思いをするナレーションを聞いた。それは「石油と水は……。」、「知識と知恵は……。」、「知屈と行動は……。」、「批評と創造は……。」と私達は豊かな物質文明の中で、大切にしなければならぬ本質的なものを忘れてか

さて、病院は都市機能を備える一つの生活空間と云われている。医療費が高過ぎる。患者の立場に立った治療を。患者サービスの向上を。インテリジェント化の指向等々。A・トプラー氏がいう「第三の波」に採まれているところだろう。しかし、病院人はこれらの荒波を乗り越えなければならぬ。ところで、医事課は荒波に採まれどう変貌するだろう



うえ経営面についても見直しを云われてきており、安閑としておれない状態です。これらの問題等について病院長を中心として、一つ一つ解決していきたいと思つています。こう書くとも今にも次々と解決出来るのではと思われませんが、難問題ばかりであり、果してうまく解決出来るか少々不安であります。前任者が立派な仕事をされた後ですので、小生も皆様方の御指導を得まして頑張っていきたいと念じております。どうかよろしくお願ひいたします。

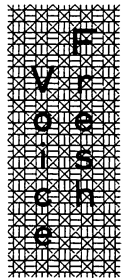
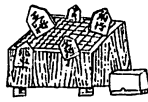
われている。多種多様の人々が行き交つているが、そこは病いを癒やし健康を取戻したいと願う人々とそれを助ける人々との集合している場だ。今、大学病院は荒波に採まれている。医療費が高過ぎる。患者の立場に立った治療を。患者サービスの向上を。インテリジェント化の指向等々。A・トプラー氏がいう「第三の波」に採まれているところだろう。しかし、病院人はこれらの荒波を乗り越えなければならぬ。ところで、医事課は荒波に採まれどう変貌するだろう

われている。多種多様の人々が行き交つているが、そこは病いを癒やし健康を取戻したいと願う人々とそれを助ける人々との集合している場だ。今、大学病院は荒波に採まれている。医療費が高過ぎる。患者の立場に立った治療を。患者サービスの向上を。インテリジェント化の指向等々。A・トプラー氏がいう「第三の波」に採まれているところだろう。しかし、病院人はこれらの荒波を乗り越えなければならぬ。ところで、医事課は荒波に採まれどう変貌するだろう

う。数年のうちに、例えば外来窓口の辺りは——予約外来が普通化し患者さんは真直ぐ診察室へ。予約のない患者さんは自動再来受付機へ。そして、初診や体の不自由な患者さんへは清潔感漂う受付嬢が優しく。患者さんは会計カードを持つことなく、診察が終わって来ると直ちに料金精算。待ち時間は大巾に少なくなっている。医療福祉相談等へ職員が振向けられより一層適切なサービスをしているだろう。毎朝のあの混乱した戦争の様な窓口の姿はもうない。職員の机から伝票の姿を見ることがも少なくなるだろう。しかし、これらの変貌は病院だけでなく、大きく社会全体が時代の要請とともに変貌していく過程の中の一現象であろう。

意識の切替えときめこまやかな対応とが、今求められているこのとき、旭川医科大学の発展のため、土台の一部として肩に力を入れず、それが半歩でも前進するよう努力したい。

この春より、広きたおやかな大地で妻、娘（4才）と三人暮らし。趣味——将棋、チェス。宇宙に関する本の雑読。



病人を診、病人を治すこと

眼科

野見山 豪

数ヶ月前までは黄色であったはずの学生用のネームプレートが白くなったのはつい三週間前のことであつた。

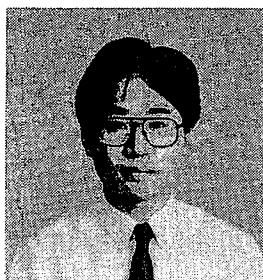
それにより最も変わったことは、知識の量でも、診察の仕方でもなく患者さんの視線である。外来でも病棟でも一人前の医師としての行動を期待されるのは、うれしい半面、しばしば恐怖と苦痛の種となる。処方出し方、紹介状の書き方さえ満足にできず、オーベンを捜して走り回ることが日課の者にとつて、期待に答えるのは至難の業である。早く仕事を覚え、技術的にも熟練して正確な診断治療を行いたいのは勿論であるが、実際に病棟の患者さんを受け持つようになる、医療技術以外の要素の大切さを今さらながら痛切に感じる。一つの薬の説明を忘れたことで、受け持ち患者さんを随分不安がらせてしまったことを後で

知り、「病気を診るのではなく、病人を診、病気を治すのではなく、病人を治さなければならぬ」という言葉を思い出した。

患者さんとの理想的な対話が初めからできる人は、恐らくいないだろうと自身自身に言い聞かせている。

やはり、多大な実践と豊富な経験、日々の努力の継続があつてはじめて、患者さんから、また同僚から信頼される医師と成り得ると思う。医は仁術とはよくいうが、仁の語源は二人の人だという。患者さんと、医療スタッフの方々と、良い人間関係をつくり、より良い医療活動を行っていたらと思う。

しかしながら現実、右も左も分らず、ただ動き回り、鍛えられるのは足腰ばかり、点滴で血管をはずす度、妙に汗ばむ手。「もう少しだからね」と言えは言うほど上擦る声、失敗とその後酒宴の繰り返しの繰り返す顔。新人歓迎会で



「かけられ」さても失われた品位など……。

「三ヶ月も頑張れば仕事もわかってくるよ」というオーベンの言葉を信じて家と医局を往復する毎日である。決して器用とは言えない私ですが皆様、宜しくお願い致します。

外来NSの紹介

外来ナースステーションの業務範囲は外来棟一階、二階、三階の十七診療科部門と特殊診療棟一階の救急室部門です。

昭和五十一年十一月一日旭川医大病院開設と共に看護婦九名でスタートし、徐々に増員され現在婦長を含め二十七名（一名は四時間勤務者）です。他のNSに較べて経験年数の多い既婚者が多数を占めています。

このことは社会生活を続けながら通院されている患者さん達にとっては、個々の多様な生活環境に合せた看護指導を効果的に展開させる為に有意義な役割を果たしていると思います。開院十余年を経過し、長期通院患者数も増加しておりますますまた患者さんを取りまく社会環境も入院加療型より日常生活を送りながらの通院

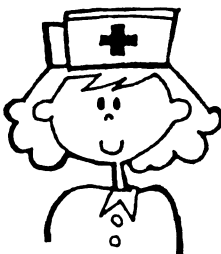
加療型へと変化して来つつあります。通院加療の在り方が、患者さんを中心に家族、医師、看護婦又は助産婦が一丸となつて、疾病と対峙する方向へと医療が向かつている現在、私達は各教科共に特殊外来を設けて、医師を中心に他部門との連携をとりつつ指導に当たっています。各科にて勉強会等を持ち、よりよき保健指導のあり方、日常生活負担を最少限にとどめる通院加療等が出来るように努力してまいります。

例えば学童期の通院患者の多い耳鼻咽喉科のアレルギー外来、産婦人科の母親学級、第二外科のストーマ外来等、列記すれば各科毎にまだまだあります。中でもストーマ外来では九階西NSの協力を受けストーマ造設患者さんの退院後の指導を行っています。又時間のかかる検査や処置も年々増加し、通院による手術件数も多く、中でも歯科口腔外科外来のバイタル、モニターチェック等要経過観察手術件数も



年々増加して来ています。看護婦の適切な対応が増え強く望まれるようになって来ている現状です。一人の看護婦の受持業務範囲が多い者で一週間に五〜六科、又一日の中でも二〜三科を担当する勤務体制の中で、万全をつくり、限られた時間の中で個別の指導をするよう努力しています。私達外来看護婦は山積する目前の業務に追われ、患者さんへの言葉かけが出来ないままに過ぎることのないように、常に患者さん中心の看護を提供出来るように心がけていきたいと思っております。

（看護婦長 田中京子）



最近の 体外受精事情

を子宮内にもどす)といった数ステップの操作が必要である。このうち、も

現在、「不妊」のカップルは全国で100万家庭を数え、このうち卵管(ラッパ管)の通過性障害が不妊である患者数は40万人と推定されている。

これまで卵管閉塞に対しては「形成手術」がおこなわれてきたが、たとえ顕微鏡手術を実施しても、内腔が針の目ほどしかないために、せつかく数時間をかけて苦勞をしても手術をしてもその成績はまことに悲觀的でさえあった。

このような理由で、不妊の原因が卵管閉塞である場合は、まず「挙児」をあきらめざるが常識となつていた。

ところが英国のエドワーズ、ステプトの両博士が世界で初めて「体外受精」に成功して以来、わが国でも少なくない成功例の報告をみるに至っている。

本道では、現在、旭川医大病院のみが実施し、北大病院でも最近「倫理委員会」が設置されたことが報道されている。

体外受精は、ただ単に夫の精子を子宮内に注入する「人工授精」と異なり、採卵、培養、胚移植(受精卵

学を終えた研究者が4名をかぞえているのもたのしい限りである。

報道関係者の協力によって静かなキャンパスで肅々とおこなわれているのが、わが旭川医大病院の「体外受精」といえよう。

(産科婦人科長 清水哲也)

【薬剤部】

副作用情報(15)

ACE阻害剤 による咳嗽

高血圧の発症と維持には種々の因子が関与していると考えられていますが、レニン-アンジオテンシン(R-A)系はその中の重要なものの一つにあげられています。

R-A系の抑制薬の一つとしてアンジオテンシン変換酵素(ACE)を阻害する薬物が臨床に供されています。これは蛋白分解酵素であるレニンからアンジオテンシンIが生成され、これが肺、腎などに存在するACEによって強力な血管収縮作用をもつアンジオテンシンIIと変換します。この変換を阻害することによって降圧作用を示すもので、経口剤としてカプトリルとエナラプリルがあります。これらは比較的使いやすい

以降圧剤といわれていますが、本邦で発売されたのはカプトリルが83年に、エナラプリルが86年と最近であります。従って安全性については、まだ十分に検討されてはいないと考えられます。

最近のBr. Med. J. 294: 1921, 1987. にニュージールランドにおける医薬品の市販後集中モニタリングプログラムの一環として、カプトリルおよびエナラプリルによる咳嗽の副作用に関して報告されております。この咳嗽に関して初めて報告したのは、S. Seokoraらによる(Arch. Intern. Med., 145: 1524, 1985.)もの、それ以来報告が増えているということがあります。

今回のニュージールランドの場合では、カプトリル(81年4月から)によるものが33例、エナラプリル(84年5月から)によるものが26例の52例(7例は両薬剤で起っている)であり、これらについて年齢、性差、投与量、適応症などを患者集団(Cohort)調査と比較し検討を加えております。

以下、要約致しますと、疾患別では心不全よりも高血圧症によく使われており、一日投与量に関しては、心不全治療に投与されているようである。カプトリル服

用者で咳嗽のある患者のうち2名は一日最大100mg以上投与されており、7名は25mg以下の量であったといひ、エナラプリルでは2名が毎日5mgのみの投与であった。投与を中止しなければならなかったのはカプトリルで25例(76%)、エナラプリルで23例(88%)であった。性別ではカプトリルが男10、女23例、エナラプリルが男9、女17例で女性に有意に多かった。

咳嗽の典型的な症状は、頑固で周期的な発作であり、乾性の咳嗽であるが時々睡眠を防げたり、あるいは嘔吐を起すような激しいものである。咳嗽の期間は、カプトリル(n=10)では9週間、エナラプリル(n=9)では4.1週間。投与中止から回復に要した期間は、カプトリル(n=7)で3.4日、エナラプリル(n=6)で5.5日であった。

ニュージールランド全人口の8%に相当する一地方のデータでは、咳嗽の頻度はカプトリルで11%(234例中)、エナラプリルで2.8%(50例中)と報告されている。このデータのみを統計的に検定すると、エナラプリルの方が有意に咳嗽の発生が高い。など、以上が主な内容であります。

咳嗽の発生原因については不明であります。ACE

Eの阻害で生じる物質が、呼吸器官を刺激して咳が発生するとか、ACEの阻害で気道におけるキニンの作用が増強するかもしれないなどとされています。またカプトリルには、動物実験でブレイキニンによる気管支収縮を高め、肺からプロスタグランディン(PG)様物質の放出を増す作用が認められております。さらにカプトリルには、高血圧症の患者においてPG E₂の生成を増加させ、これらが呼吸器官を刺激することによって発生するのではないかと考えられています。

副作用の処置としては、投薬中止はもちろんの事、先の発生原因からPG合成抑制剤が考えられ、事実エナラプリルによって生じた咳嗽に対し、スリリングクで改善したとの報告(Lancet, April 11: 872, 1987.)があります。

なお、添付文書における両薬剤の咳嗽に関する副作用をみると、共に「その他」の項にあり、カプトリルでは「まれに咳嗽(喘声)、エナラプリルでは「ときに咳嗽」と記載されております。

(薬品情報室長 藤田育志)

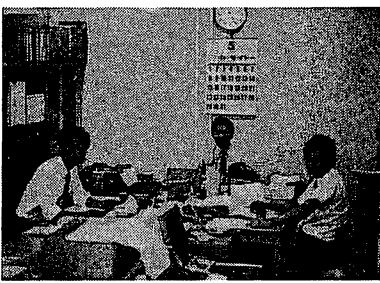
* * * * *

医事課の紹介 3 収納係

今回は収納係を紹介します。収納係では、係長以下3名で、診療費の収納・保管及び払込み、診療費等の債権管理、他の医療機関からの病理組織検査の検査料金の徴収等専ら病院収入に關することを担当しております。

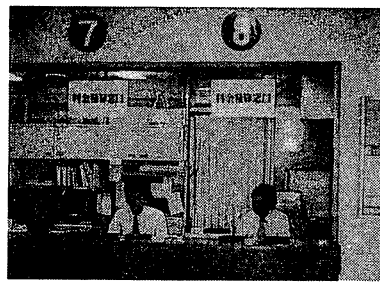
昭和六十二年度の附属病院収入は六十二億八百五十一万二千円(前年度比六・六%増)、受託調査試験等収入(病理組織検査等)は三千九百五十万四千円(前年度比十五・三%増)であります。

現金収納の窓口は7番、8番で行っており、入院患者、外来患者合せて、平日約五百七十人の診療費を収納しています。



日頃、マイクを片手に「何々さん、7番(8番)までお越し下さい。」と美声

?を張り上げて迅速でしかもつり銭を間違わないように、そして患者さんには親切・丁寧な対応を心がけながら頑張っています。時には、患者さんから待



ち時間が長い、先に手続しているの後の人が呼ばれている、料金が高いのはどうしてか等色々と言われていることがあります。

窓口収納以外には社会保険診療報酬支払基金、国民健康保険団体連合会等の保険請求があります。これらは毎月約三十件の納入告知書を発行して請求しますが、収入面では現金収入に比べて大半(六十二年度では約八十七%)を占めています。このほか病理組織検査の料金徴収事務を行っています

が、旭川市内を初め、道北・道東の医療機関約三十施設から組織検査の委託を受けております。病理部がこの受付窓口となり、収納係で各医療機関に納入告知書を発行し請求しますが、その受付件数は月平均約四百件あります。

以上のように収納係は病院収入を一手に引き受けている訳ですが、徴収もれないように医事係、入院係及び外来係と連絡を密にし、また患者さんには常に明るい笑顔で接したいと考えております。

(医事課)

飽食時代と食物繊維

現在は飽食の時代といわれている。グルメ時代ともいわれている。我々のまわりには様々な美味なるもの、栄養価の高いものがあふれ、マスコミは毎日のように誘惑の触手を我々の目や耳に伸ばしてくる。更に、車社会が極端に発達し、日常生活から足腰を使用する機会が大幅に減少してきた。

これらのことから当然の結果として体重の増加が起り、肥満人口が徐々に増えている。特に低年齢層で著しいという。肥満は糖尿病、

高脂血症、高血圧、心疾患などと密接に関係していることが明らかにされつつあり、このままの社会環境が続けば、将来日本人の五人に一人は糖尿病になるであろうと予測されており、また日本人の子供の血清コレステロール値が近年急速に上昇し、欧米人の子供のそれよりも高くなったとする報告もでてきている。いずれにしてもあまり喜ばしい状況とは言い難い。疾病と食事に関する有名な研究の一つにトウロウエルやパーキツトの植物繊維欠乏症がある。彼らは加工されない炭水化物や植物繊維を多く摂取する国民には大腸癌、心血管障害、糖尿病などの疾患が少ないという疫学調査から、これらの疾患における植物繊維の重要性を強調した。こうした基礎的成績に基づきアメリカ、カナダ、イギリスの各糖尿病学会は糖尿病患者の食事療法においては、脂肪の摂取量を減らし、炭水化物の摂取量を増やすようにとの勧告を出した。同時にこの中に単純糖質を制限し、炭水化物はできるだけ線維成分の多い天然のものから摂取するように勧告されている。食料事情の悪かった時代には何の栄養にもならないカスのような存在であった植物繊維が、飽食時代の今、俄に脚光を浴びてきたのである。何とも皮肉なことである。

近年、このカスを精製した様々な商品が薬まがいの高い値段で市場に出回りしかも良く売れているという。これも時代の流れなのであろうか。近年、遺伝子解析の技術が飛躍的に進歩し、今後かなりの部分の遺伝的疾患や従来体質的要素が大きいとされてきた疾患などは、その診断と治療は次々と確立されていくと思われる。一方、癌やエイズなどは別として、生活様式や食生活などの環境因子に左右される本来は予防されてしかるべき疾患は今後ますます増えるであろうと予測されている。これら習慣病ともいえる病態が完全に制圧される時、メダラー教授のいう疾病と時代の変遷での第五期の時代はいつ頃訪れるのだろうか。我々、糖尿病などの慢性疾患を扱うものの夢である。

(第二内科講師 渡邊 清)



「病院ニュース」の原稿募集について
病院ニュースに載せる原稿、写真及び、カット等を広く募集します。



- 昭和六十三年 度
「病院ニュース」
編集委員
- 委員長 清水教授 (産婦人科)
 - 委員 渡邊講師 (第二内科)
 - 委員 草野講師 (第二内科)
 - 委員 吉田講師 (眼科)
 - 委員 信岡技師長 (検査部)
 - 委員 阿久津副部長 (薬剤部)
 - 委員 増岡副部長 (看護部)
 - 委員 山下課長補佐 (庶務課)
 - 委員 栗田課長補佐 (医事課)